

[普及事項]

新技術名：モモの夏季せん定と結果枝の形成（平成15年）

研究機関名 果樹試験場 鹿角分場
担当者 船山瑞樹

[要約]

モモの硬核期直前に60cm以上の強勢な新梢を10cm程度残して夏季せん定すると、新たに発生した副梢の花芽形成率が高く、適度な勢力の優良な結果枝が確保できる。

[ねらい]

側枝や第1主枝上の主幹に近い部分、または、背面から発生した新梢は極めて勢力が強くなりやすく、通常では結果枝として利用できない。そのため、これらは冬季にせん定され、結果的に大きな切り口を作ることになり、枯れ込みや凍害の発生を助長する。

そこで、このような強勢な新梢を夏季せん定することによって勢力を抑制するとともに、優良な結果枝へ誘導するために、夏季せん定の時期、夏季せん定の程度、対象とすべき新梢の長さ、副梢の花芽形成率を明らかにし、優良な結果枝確保のための夏季せん定法を普及する。

[技術の内容・特徴]

1. 「川中島白桃」4年生樹、6樹を対象に、夏季せん定を7月1日と7月14日に行った。夏季せん定の程度は7月1日では新梢の基部を5cmと10cm残してせん去し、7月14日では同様に10cmと20cm残してせん去した。
2. 仕上げ摘果終了後、硬核期直前の7月1日に、新梢の基部10cm残して夏季せん定すると、7月14日に同様に夏季せん定した場合よりも、残された新梢基部からの副梢の発生量が多くなる（表1，表2）。
3. 夏季せん定後に新たに発生した副梢の花芽率は、7月1日に夏季せん定した場合のほうが7月14日に夏季せん定した場合よりも高い。そのため、結果枝を確保するためには、より早い7月1日に夏季せん定するほうが有利である。（表3，表4）。
4. 夏季せん定後に新たに発生した副梢の長さは、いずれのせん定期でも20cm弱であり、夏季せん定を行うことで新梢伸長を大幅に抑制できる（表3，表4）。
5. 7月1日に新梢の基部10cm残して夏季せん定を行った場合、せん定時の新梢長が50cm前後の枝では副梢が発生しにくいですが、せん定時の新梢長が60cmを超えるような強い枝では、せん定後に副梢が発生しやすく、高い確率で副梢を確保できる（図1）。
6. 夏季せん定の実施時期は、県南部では6月中旬頃、県北部では6月下旬頃をめどにする。

[普及対象範囲]

県内のモモ生産農家

[普及上の留意事項]

1. 夏季せん定は葉数減少による樹勢低下を招きやすいので、60cm未満の新梢には行わない。
2. 夏季せん定の時期が遅くなると、結果枝の形成は困難になる。

[具体的なデータ等]

表 1 7月1日処理時の新梢の状態と処理後副梢が発生した枝の割合

処理	処理時の新梢の状態			処理後副梢が発生した枝	
	処理本数 (本)	平均新梢長 (cm)	平均基部径 (mm)	本数 (本)	発生率 (%)
5 cm ^z	8.3	79.2	6.7	3.0	36.7
10cm	8.3	72.6	6.4	5.3	65.5

^z 夏季せん定後の新梢の長さ。

表 2 7月14日処理時の新梢の状態と処理後副梢が発生した枝の割合

処理	処理時の新梢の状態			処理後副梢が発生した枝	
	処理本数 (本)	平均新梢長 (cm)	平均基部径 (mm)	本数 (本)	発生率 (%)
10cm	5.7	91.3	7.6	2.3	41.8
20cm	5.7	88.1	7.3	2.7	48.8

表 3 7月1日処理後新たに発生した副梢の状態

処理	副梢数 (本)	花芽率 ^y 50%以上の副梢			花芽率50%未満の副梢		
		本数 (本)	平均副梢長 (cm)	発生率 (%)	本数 (本)	平均副梢長 (cm)	発生率 (%)
5 cm	4.5	3.5	18.2	81.9	1.0	13.6	18.1
10cm	7.7	7.0	19.1	91.3	0.7	4.1	8.7

^y 全えき芽数に対する花芽が形成されたえき芽の割合。

表 4 7月14日処理後新たに発生した副梢の状態

処理	副梢数 (本)	花芽率50%以上の副梢			花芽率50%未満の副梢		
		本数 (本)	平均副梢長 (cm)	発生率 (%)	本数 (本)	平均副梢長 (cm)	発生率 (%)
10cm	2.7	1.8	14.5	65.0	0.8	11.3	35.0
20cm	4.2	2.5	17.0	64.5	1.7	12.9	35.5

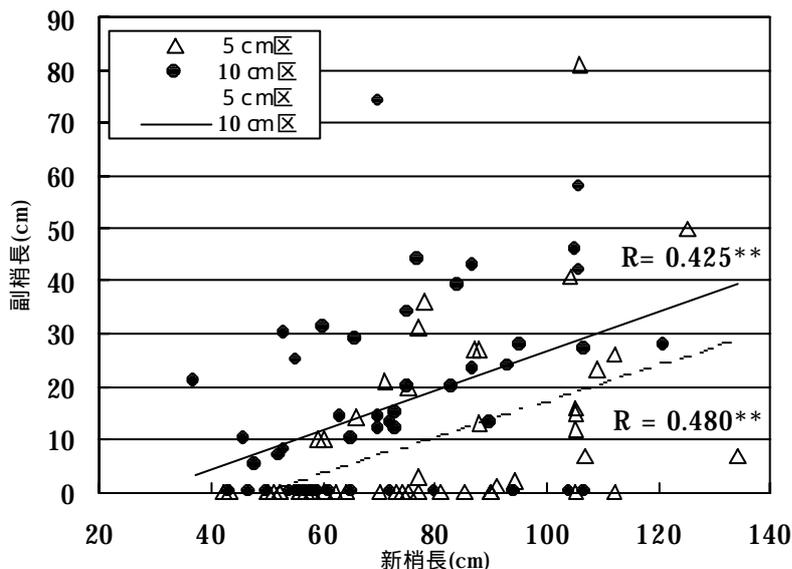


図 1 7月1日処理時の新梢長と新たに発生した副梢長
の関係 (**は1%レベルで有意)



図 2 夏季せん定後の副梢と花芽形成

[発表文献等] なし